『平家物語』成立の論理

小林美和

はじめに

何を以って『平家物語』の成立とするのかという点については、なかなかに困難な問題が含まれている。『平家物語』の原態が明確でないこと、多種多様な『平家物語』テキストが現存すること等、外的諸条件も相俟って、『平家物語』のような複雑な要素を持つ作品にあって、そもそも「成立」とは、いつの時点、どの次元でのことをいうのか、それは如何なる意味での「成立」なのか等々、にわかには論じ難い問題がある。[1]

『平家物語』の成立については、このような問題があることを承知しつつ、この小稿では、『平家物語』の作品成立の問題について、〈それはどのような構想と論理によって成立したのか〉という点について筆者なりの簡単な見取り図を描いてみたい。平家のいくさに関するさまざまな語りや伝承が日本各地に澎湃として起こり、それらが一つの大きな体系の中に組み込まれていく過程はどのようなものであったか。そして、そこにはどのような論理や構想のはたらきがあったのか。

研究史の視野から

筆者が『平家物語』の研究に参画しはじめた昭和四〇年代後半は、『平家物語』の古態をめぐる論議が盛んになろうとしている時期であった。その中心は、当時読み本系『平家物語』と呼称されていたテキスト群の中、四部合戦状本『平家物語』と延慶本『平家物語』について、それぞれの古態性を論じるものであった。四部合戦状本の古態性を主張したのは山下宏明[2]、信太周[3]両氏等であり、延慶本古態説を唱えたのは、水原一氏[4]や筆者[5]等であった。

その一方で、兵藤裕己[6]氏は、独自の語り論の立場から、『平家物語』における読みと語りの問題を論じた。氏によれば、『平家物語』における語りとは、モノカタリであり、それは権力から疎外された敗者即モノ（霊）による負の歴史語りを意味するもので

ある。しかし、その一方で、兵藤氏は、このモノガタリに対応するものとしてヨミの世界があったとした。すなわち、体制側により史実としての正統性が認められる、信じられるべき歴史書としての平家の物語があり、それは言葉の本来的な意味でのヨミ本というにふさわしいとした。そして、平家の物語はカタリからヨミの世界へと変貌を遂げたとした。

兵藤氏のこの論は、その後の氏の『平家物語』研究の原点をなすものであり、その発想の斬新さはいまだ魅力的である。そして、それは柳田国男[7]が構想した語り物論と基本線において通じ合うものであり、理念的レベルでの蓋然性を筆者も疑うものではない。しかし、視点を現実の『平家物語』という作品レベルの解釈に限定すると、兵藤氏の論にはやはり無理があると思われた。例えば、『平家物語』諸本に共通してみられる膨大な史料の取り込み、しかも政権の中枢部もしくはその周辺にいなければ入手不可能と考えられる史料・情報がかなりの量に達し、しかも作品の基本的な部分を構成している点をどのように考えるか。

『平家物語』の二元的成立論[8]、即ちいわゆる語り本と読み本の二元的成立という視点が、この問題とどのように関連するのか。しかし、今日の『平家物語』諸本研究は、語り本といえども現延慶本的本文を踏襲するものとの見解が定着しつつあり、原理的意味においての二元成立説はその蓋然性を有しないと見るのが妥当であろう。近時、山下宏明[9]氏が、「『平家物語』論の課題は、作者論であるよりも受容論である」と指摘されているのも、この問題と関わるものであろう。氏のこの指摘は、基本的に語り本のテキストについてなされたものであるが、その意図するところは、兵藤氏による語りから本文へという構想を少なくとも『平家物語』の次元においては否定する点にあるといえる。即ち、兵藤氏が前掲の書物以降、企図してきた語り論[10]は、京都で作成され、一定のレベルまで固定化された文字テキストの地方における受容の過程での変形と受け止めるべきだという論調となっている。

この点についての筆者の見通しは、以下の通りである。おそらくモノ（霊）を語る平家の物語は、比較的小さな形態として各所で発生したが、まとまった物語の体裁を獲得することはなかった。そして、体制擁護の立場からする政権獲得の物語として企図された『平家物語』の制作過程において、その一部が編入されていった。この『平家物語』が制作されるに際して、制作者は、その思想的枠組みとして、八幡神擁護思想と仏教的因果観を配した。しかし、一部の政治的立場からする政権獲得の物語は、文芸としての普遍性を持ち得ない。それが、その後の語り本『平家物語』への展開を促したのではないか。

筆者は、『平家物語』成立を見定めるについては、それがどのような意図に基づいて制作されたのかという観点を重視したいと考える。物語の構想は作者の頭の中にあるとして、あのような膨大な史料を集める意図はどこにあったのか。また、それはどのようにして集成されたのか。筆者にとって、『平家物語』の成立について考えることは、それは基本的に延慶本について考えること

を意味する。それは、このテキストが、唯一これら膨大な史料の収集に要したエネルギーの根拠を説明するに足る内容を備えていると考えるからである。

水原一氏[11]は、その説話生成論的立場から、延慶本の古態性を主張された。そして、同時に、その雑纂的性格、作品としての構想性の欠如を説かれた。それは、『平家物語』に取り込まれたと想定される説話や語り物の腑分け作業の実践から、延慶本におけるそれらがより本来の姿をとどめているとすることを以って、その古態性の証左とする氏の方法論からして、当然の結論であった。要するに、『平家物語』制作に際し、取り込まれたさまざまの史料が、作者の手によっていまだ十分咀嚼されず、未消化なまま、雑然と取り込まれているといった点に、より原態に近いテキストとして延慶本の価値を認定しようというものであった。

筆者はそれに対して、明らかに別な立場を表明してきた[12]。即ち、延慶本は一見雑然とした様相を呈しながらも、そこには作者による統一された構想力が作用していると考え、その基底には、一定の政治的立場や思想性が見られると主張した。水原氏は氏の仮説を拠り所として筆者の論に強い批判を加えられた[13]。水原氏が作品としての延慶本ではなく、そこに包含されている個々の情報の素材としてのいわば鮮度・純度に注目されたのに対し、筆者はむしろ一個の作品としての性質に注目したというという相違が、氏の批判を招いたのだと考えられる。しかし、素材としての鮮度・純度が、作品としての統一性を損なうものとは必ずしもいえない。

延慶本においては、素材自体（それが純然たる外部史料かどうかの詮索は別として）に、作者の意図を語らせるといった方法が採られることが多い。そして、それらの史料の意味付けについては、ある程度注意深く読むことによって解釈可能である。それらの意味の連鎖がより高次元の一つの大きな意味を形成してゆく。このあたりの事情は、均一で統一された文体による作品構成という近代文学の概念から大きく逸脱するものであろう。その意味において、延慶本を論ずる場合、「構想」という表現の使用には注意を要するのかも知れない。

延慶本成立の枠組み

延慶本『平家物語』成立の基底をなしている、いわば物語的求心力のありかはどのようなものか。筆者は、この書物の性格の最も重要な側面をなしているのは、そのイデオロギー的側面であると考えている。それは、政治的イデオロギーであると同時に宗教的イデオロギーの側面であり、両者の一致点に単に延慶本のみならず『平家物語』成立の基盤を読み取ることが可能と思われる。以下、この小稿では、イデオロギーの書としての延慶本の政治的、宗教思想的枠組みについて、その素描を試みてみたい。もとより、これらの個々の要素は相互に密接に絡み合っており、本来、切り離せるものではないのだが、ここでは、ポイントを明確にするため、以下のように整理してみた。

〈政治思想的枠組み〉

延慶本が主張する政治的枠組みを以下の各要素の統合の上に想定してみたい。箇条書的に列挙すれば、次のようである。

① 天道思想と怨霊慰撫による国家安泰
② 皇統寿祝の精神
③ 山門国家観
④ 頼朝政権獲得の物語
⑤ 九条家の政治圏

天道思想と怨霊慰撫による国家安泰

①は、この物語が平家一族の滅びを語る本質的動機をなすものであろう。平家一族の滅亡を描くことには、「盛者必衰」といった無常観的思想を説くといった観点も無視できないであろうが、延慶本にあっては、それは背景として物語の色調の一部をなすに過ぎない。「祇園精舎ノ鐘ノ声」[1]以下の唱導的文辞は、作者の身に備わった職業的属性がなさしめるものであって、その趣意は無常の思想を説くことにあるのではない。無常の調べに乗せて作者が物語っているのは、秦の趙高や漢の王莽をはじめとする謀叛の徒が、その「驕ル心」や「猛キ事」故に滅んでいった歴史の事実である。そして、その背後には常に天道の照覧があったとする。延慶本にあっては、「縦ヒ、人事ハ詐ト云トモ、天道詐リガタキ者哉」という序章の一句が示すように、平家は天道への違背故に滅んだとし、そこに歴史の道理があるとする。

このモチーフは以後の物語の展開の中で繰り返し登場してくる。たとえば、三本、廿八「兵革ノ祈秘法共被行事」では諸国の兵が次々と平家に背き、源氏に従ったことを記し、

昔シ王莽棄民アリシカバ、四夷競ヒ起リ、莽ヲ漸台ニ斬ル。身肉臠ヲ分ケ、百姓其ノ舌ソ食キ。世挙テ平家ヲ悪スルコト、王莽ニ異ナラズ。

と、漢の王莽の故事を引きつつ、

人ノ帰スル所ハ、天ノ与フル所也。人ノ叛ク所ハ、天ノ去ル所也。

と、世間の平家離反も結局、天命の去るところと述べている。作者の歴史認識の根底には、このような天道観をみることができると思われる。こうした認識は、平家のみならず木曽義仲の滅びについても示されている。義仲の京都侵攻を漢の沛公の咸陽宮侵攻の故事と比較しつつ、

義仲モ先都ヘ入ルト云トモ其ヲ慎シミテ頼朝ガ下知ヲ待チシカバ、沛公ガ謀ニ劣マジ物ヲト哀也。義仲悪事ヲ好ミテ天命ニ従ワズ。剰法皇ヲ徧奉リテ叛逆ニ及ブ。積悪ノ余殃身ニ積テ、首ヲ京都ニ伝フ（五本、十二「義仲等頸渡事」）。

と、悪逆と天命に対する違背をその滅びの因としている。そして、こうした歴史認識は、物語結末部の大原御幸の場面にお

いて、建礼門院自ら、

我等ガ一門、只官位俸禄身ニ余リ、国家ヲ煩スノミニアラズ、天子ヲ蔑如シ奉リ、神明仏陀ヲ滅シ、悪業所感之故也。

と、我子安徳天皇の亡びを平家一門の悪行故と語る視点と呼応するものである。悪行故に滅亡した平家一門は、怨霊となって苦界でもがきあえいでいる。その魂は仏法の力を以って、罪を清め、救済されるべきである。こうした発想は、天台比叡山の法華経思想に基づくものであろうが、怨霊救済の要請は、仏教界というよりは、むしろ政治の場から強力になされたものであろう。王法仏法相依の伝統が色濃く残存する時代のことであるから、両者を直截に分かつわけにはいかないが、怨霊の発動が天災地変をもたらすとなれば、それは宗教的問題であると同時に、より政治的な問題である。

為政者は常に天道の照覧にさらされている。そうした中にあって、為政者のあるべき姿とはどのようなものか。前掲「縦ヒ、人事ハ…」に続いて、作者は「王麗ナル猶此ノ如シ。況ヤ人臣従者争カ慎マザルベキ」と人臣の「慎」みを求めている。そして、その「慎」を欠いた例として平清盛の物語が語り出されるという構成となっている。

その意味において、延慶本作者の立つ位置は、古典的な政道観に基づくものといえ、清盛は、冒頭に登場する歴史上の諸人物と同じく、その滅びが最初から約束されている。しかしながら、物語は清盛をはじめとする平家一族の悪行断罪をもって終わるわけではない。彼等の犯した罪と穢れは、滅亡後に怨霊となって、現体制を襲うこととなり、それは重大な政治問題となる。物語の機能は、平家の怨霊をひたすら慰撫する点にあるのではない。彼等の行為が天道に違背するものであることを解き明かした上で、死後の世界にまで持ち越されたその罪と穢れを払うことにこそ、この物語の機能があったと考えられる。

皇統寿祝の精神と山門国家観

②③については、かつて詳細に述べたことがあるので、ここでは省略したい。この物語の作者は、基本的に叡山山門の加護下における王統を中心とする治世と国家の安泰という図式を理想的体制としている。この物語の基底には、なお皇統寿祝の精神が流れているといえる。[15]

頼朝による政権獲得の物語

④は、この物語の最も大きな枠組みの一つである。それは、平家一族の悪行がもたらした世界の秩序の紊乱を頼朝が回復するという大構想に従ってこの物語が構成されているということである。その基本的姿勢は、この物語が頼朝の為政祝福を以って終わっているという点に端的に示されており、平家の滅亡を以って物語を終了する語り本との基本的な相違がここにある。語り本が頼

朝の動向をあまり詳細に描かないのに比して、延慶本がさまざまな説話を織り込みながらかなり綿密にそれを描いている点は、両者の物語的構想が基本的に相違していることによるものであろう。

一見種々雑多に感じられる膨大な頼朝説話群は、注意深く読めば、それらが一つの、かなり強固な物語的求心力を持っていることがわかる。それらは、

1. 頼朝はなぜ謀叛を起こしたのか。
2. 頼朝はなぜ関東を制することができたのか。
3. 頼朝が謀叛人から朝敵追討の総責任者へと変身し得たのはなぜか。
4. 頼朝は義仲・義経といった近親者をどのように滅亡に追い込んだか。
5. 頼朝は、どのようにして京都政権を支配していったのか。

といった問いかけに答える形で物語られていく。さまざまな〈なぜ〉に対し逐一答えていくことこそが、〈頼朝はいかにして天下の覇権を獲得したのか〉という大テーマへの解答に繋がっていく。そして、その政権獲得の具体的戦略は、

1. 勅勘を解かれ、平家討伐の院宣を手に入れる。
2. 源氏の守護神である八幡大菩薩、或いは伊豆箱根、三島といった関東の在地神の加護を受けること。
3. 北条時政を腹心とたのむこと。
4. 東国在地武士団の人臣をつかむこと。
5. 東国武士団に対して、自ら君主として臨むこと。
6. 自らの対抗勢力となり得る者の排除。

といったものであった。延慶本はさまざまな説話を通して、これらを物語り、全体としてかなり強固な求心力を持った頼朝覇権獲得物語を形成している。

頼朝の覇権獲得の過程は、そのまま、平家によって破壊された秩序の回復の過程であった。山門の加護による王統の治世、さらには摂関家による補佐といった旧体制を基本的な国家の枠組みとする延慶本作者からみて、頼朝政権の発足がその政治的理想に適うものであったかどうかについては疑問が残る。

しかしながら、混乱した秩序の回復者という一点からのみみても、その存在は必要不可欠なものと映ったと考えられる。たとえば、巻十二（六末）にかぎってみても、冒頭には大地震記事、さらに竜神による天台の仏舎利奪取の説話が記されており、これは平家怨霊による秩序の混乱を意味するものである。そして、物語は以後、頼朝による秩序回復の過程を記してゆく。それは、平家の残党狩や源範頼、義経、行家の討伐といった武力行使の側面だけではなく、その官位昇進や守護地頭の設置、京都政権の人事への直接的介入等、政治的側面についても同様である。

たとえば、頼朝が「議奏ニ預カルベキ人々」の交名を関東から京都政権に注進したとして、藤原兼実以下の十一名の名を記し、

今度源二位（頼朝）注進状ニ入レル人ハ、其ノ威ヲ振ヒ、入ラザル人ハ、其ノ勢ヲ失フ。世ノ重ジ人ノ帰スルコト、平将

軍ニ万倍セリ。是人ノ成スニ非ズ、天ノ与フル所也。

と、頼朝の覇権獲得が天命に添うたものであるとしている。その意味においても、延慶本の物語構想の中心の一つは、頼朝の覇権獲得の過程を語ることにあったといってよい。

九条家の政治圏

⑤の九条家との関わりについては、延慶本においてその記述がことに詳細である。摂関家における近衛家と九条家の確執は、九条家出身の慈円の『愚管抄』の記述などから窺われるが、延慶本の記述には、そうした両家の確執の影が宿っている。延慶本は、頼朝の後押しによって九条兼実が内覧の宣旨を受け、続いて摂録の詔書を受けたことを明瞭に記しており、同時に近衛家の失脚を記している。

右ノ大臣（兼実）ハ神寂ビテ九条ニ御座ケルガ、保元平治ヨリ此方、世ノ乱レ打ツヾキテ、人ノ損ジタル事ヒマナキヲ、朝夕歎キ思シ召シケル陰信空シカラズ、陽報忽チニ顕レニケルヤラム、カヽル御悦ビ有リケリ。甲斐〳〵シク乱レタル世ヲ治メ、スタレタル事ヲ起コシ給ヒケリ（六末、二二「十郎蔵人行家被搦事付人々被解官事」）。

右は、九条兼実の摂録就任を記した件であり、ここからは明らかな九条家擁護の姿勢が伝わってくる。そして、それが頼朝の推挙によるものであることを明瞭に記している。

九条家が公武合体政権の中枢にあったことは、よく知られた事実であるが、延慶本構想上の政治的枠組みも、およそこれに対応するものと考えられる。そして、これは

ソレニ今ハ武士大将軍世ヲヒシト取テ、国主、武士大将軍ガ心ヲタガヘテハ、エヲハスマジキ時運ノ、色ニアラハレテ出キヌル世ゾト、大神宮八幡大菩薩モユルサレヌレバ、今ハ宝剣モムヤクニナリヌル也（『愚管抄』）。

という慈円の政治認識とも響き合うものであろう。即ち、ここには、現代は武士大将軍たる頼朝が天下の覇権をしっかりと握っており、国主即後白河法皇も頼朝と離反してはいられない時代であるということを伊勢大神宮、八幡大菩薩も認められている…といった趣旨が述べられている。

延慶本が頼朝による覇権獲得の過程を詳細に描き、それを称揚していく姿勢、さらに頼朝の治世を寿祝して物語を終えていると いった点に、こうした九条家の政治的立場の反映を読み取ることは、確度の高い蓋然性を持つものと考えられる。

〈宗教思想的枠組み〉

前述したように、延慶本を読むにあたって、宗教的枠組みと思想的枠組みを区分することは、ほとんど無意味である。両者は分ちがたく結びついており、本書の宗教的枠組みを論じることは、政治的枠組みについて考えることであり、政治思想は、そのまま

宗教的世界と密着している。少なくとも、延慶本の持つ世界は、いまだそうした風土の中にある。天台法華思想による怨霊慰撫の観念一つとっても、それは政治の場と直結している。

しかし、そうした中にあって、あえてこの物語から政治とは離れた宗教思想的枠組みを抽出するとすれば、それは、**仏教的因果観**や**仏教的倫理観**ということになるであろうか。

たとえば、前述したように、頼朝による覇権獲得の物語は、世界の秩序回復の物語として政治的レベルにおいてはあるべき治世として祝福されている。しかし、そうした政治的レベルを一歩離れて、頼朝個人の生き方の問題としてとらえた場合、その視点は必ずしも好意的であるとはかぎらない。つまり、倫理的な観点からは、延慶本作者は、頼朝の生き方を許容しているとはいいがたい面がある。

よく知られるように、頼朝は平治の乱で囚われ、あやうく死罪となるところを、池の尼の嘆願を経て、清盛に助命されている。

平家ノ人々ヲ別ニ私ノ意趣思ヒ奉ルベキ事ナシ。其ノ上、池ノ尼御前イカニ申シ給フトモ、入道免シ給ハズハ、争カ命生クベキ。頼朝ガ流罪ニ定マリシ事ハ、入道殿ノ御恩也（六末、三十二「小松侍従忠房被誅」）

と、頼朝自身に語らせているように、頼朝の今日あるのは、池の尼および清盛による助命の結果である。しかし、頼朝はその恩に仇で報いた。実は延慶本においては、池の尼および清盛による頼朝助命のモチーフは、繰り返し登場してくる。物語終結部にいうように頼朝が前世からの「果報目出」き人物であったとしても、現世における忘恩の行為は、仏教的倫理の観点からすれば、いかに評価されるべきか。

昔ノ恩ヲ忘レテ、朝威ヲ軽ズル者ノ、忽チニ天ノ責ヲ蒙リヌ。サレバ、頼朝旧恩ヲ忘レテ、宿望ヲ達セム事、神明ユルシ給ハジト、旧例ヲ考ヘテ、敢テ驚ク事無リケリ（二中、十五「石兵衛佐謀叛発ス事」）。

頼朝挙兵に際してのこのような記述は、そのまま作者の思想の表明であると考えられる。そうでなければ、頼朝助命のモチーフが物語の中で執拗に繰り返されることはなかったであろう。平家や木曽義仲は、その悪行故に天道や仏神に背き、破滅を迎えた。それは、神明による処罰であり、換言すれば因果応報の現世における具現である。とすれば、忘恩の徒頼朝に対する仏神の処罰はいかにあるべきか。この問題は、歴史と向き合った作者にとってわれわれの想像以上に重要な問題であったと思われる。

しかし、この問題は、結局のところ、延慶本作者内部では決着をみていないと思われる。政治思想的枠組みと仏教者流の因果思想は、延慶本の中においては、その整合性を獲得していないかにみえる。

以上、きわめて粗雑なメモではあるが、延慶本『平家物語』の思想的枠組みについて、いくつかの要素を取り上げてみた。この物語は、これらの諸要素の密接な関連のもとに、きわめて求心力

の高い物語を形成していると考える。しかし、それは、近代文学における構想の完成度といった問題とは次元を異にするものである。

延慶本の作者は、以上のような歴史に対する構想を、自家薬籠中の唱導流の文体や、現実の事象の意味を図る源泉としての故事の引用、さらには説話そのものに意味を語らせる等といった手法によって表現しようとしたと考えられる。

注

(1) 牧野淳司氏の『軍記と語り物』38号における『平家物語』研究展望等参照。
(2) 山下宏明「平家物語四部合戦状本に関する研究」(名古屋大学教養部研究紀要第十一輯) 等参照。
(3) 信太周「〝歴史そのまま〟と〝歴史ばなれ〟—四部合戦状平家物語をめぐって—」(文学S41・11) 等参照。
(4) 水原一「『四部合戦状平家物語』批判」、「『延慶本平家物語』考」(いずれも『平家物語の形成』所収) 等参照。
(5) 小林美和「『平家物語』古態論」(『平家物語生成論』所収) 参照。
(6) 兵藤裕己『語り物序説』参照。
(7) 柳田国男「有王と俊寛僧都」(『物語と語り物』所収) 参照。
(8) 富倉徳次郎『平家物語研究』参照。
(9) 山下宏明「『平家物語』の受容—批評のゆくえ—」(文学2002年7・8月号)
(10) 兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』参照。
(11) 水原一『平家物語の形成』および『延慶本平家物語論考』参照。
(12) 小林美和『平家物語生成論』および『平家物語の成立』参照。
(13) 水原一『延慶本平家物語論考』参照。
(14) 延慶本の本文引用は、勉誠社版により、一部、読みやすくするため表記を改めた。
(15) 小林美和「寿祝と唱導の文芸」(『平家物語生成論』所収) 参照。

(こばやし・よしかず　帝塚山大学短期大学部教授)

(付記) この小論は、平成十四年度立命館大学日本文学会における同題での講演を論文の体裁に書き改めたものであることをおことわりしておきたい。